

1. カワカブに通い続けた 25 年

～遺体捜索と聖山探索そして山に生きる人々との出逢い～

「梅里雪山 17 人の友を探して」 著者、カワカブ会代表 小林尚礼

17 人が亡くなった梅里雪山（6,740m）での遺体捜索に、1998 年から 25 年間関わってきた。京都大学学士山岳会と中国の合同隊であったが、5 年で 16 人の遺体を収容してからは私 1 人で毎年出かけてきた。なぜそれほど長く続けてきたのだろうか。

理由の 1 つは、還らなかった友とその家族のためだ。そして回収した遺品やメモ帳から、最期の瞬間を知る手がかりを探していた。2 つ目は、氷河の下流に暮らす村人たちのためだ。神聖な山が遺品によって汚され、遺体が出現した氷河の水を飲む子どもの姿を見て、それらを取り除かなければならないと思った。協力してくれた村長とは親しい友人になった。3 つ目は、聖山カワカブ（梅里雪山のチベット名）の魅力に惹き付けられたことだ。聖山を一周する巡礼路を歩いて人々と山との特別な繋がりを感じ、聖山とは「生命の源」なのだと気づいた。この山へ登山すべきではないと考えが変わった。

最後の 1 人を見つけたいと考えて捜索を続けてきたが、2023 年に現場の氷河が融け上がり河床が顕になった様子を見て、もうこれ以上探す所はないとわかった。全員を収容できなかったのは無念だが、やれることは全てやったと思えた。

村長の娘が 17 年前から日本に住むようになった。家庭を持ったが数年前に問題が起きて、私は支援に奔走した。ようやく乗り越えて、この夏子どもと共に村へ一時帰省させることができて皆で喜んだ。変化の早い現地では、25 年前に私が撮影した写真が貴重になり、新たな仕事生まれそうな気配もある。

カワカブに通い続けた物語を報告します。

2. がんと歩む世界七大陸最高峰

医療法人 Shindo 旭川リハビリテーション病院 理事 麻紀子

2015 年、南米大陸最高峰アコンカグアへの登頂の誘いと同時期に乳がんが見つかりました。そこから七大陸最高峰の挑戦とがん治療を同時に続け、2023 年のエヴェレスト登頂をもって七大陸最高峰に全て登頂しました。その経験と、そこで得た知見を、エヴェレスト登頂での体験を中心にお話いたします。

1) 治療を続けながらセブンサミッターとなるまで

手術を延期して臨んだ初めての南米での高所登山は、肺水腫により敗退しました。帰国して手術を受け、その後、放射線治療とホルモン治療による副作用に悩まされるとは知らずに、病室

からアフリカでの登山の手配を始めました。退院し、キリマンジャロ登頂成功後、リンパ浮腫に罹りましたが、南極のヴィンソン・マシフと北米のデナリに続けて登りました。次に卵巣嚢腫が見つかり、破裂の可能性を指摘されながらもロシアの エルブルスに挑戦しました。

ホルモン治療の副作用は全身的に現れ、そのつらさから何度もやめようと考えながらも治療を続け、2019 年のエヴェレスト敗退からコロナウィルスの世界的流行が落ち着いた 2023 年の再挑戦で登頂成功を果たし、7 大陸最高峰全ての山頂に立つことができました。

2) 両方続けた理由とは

治療の不調は、高所登山に役立つという発見もありました。治療に専念したほうがいいという声もありましたが、つらい治療には、もっときつい登山をすることで、つらい状態を忘れ、むしろ日々のありがたさに目を向けられるようになりました。

これは私が体験した「がん治療」と「高所登山」の組み合わせに限ったことではないと考えています。世の中には多くの苦難や困難があります。そうしたことに直面した時は、何か他の大きなことに挑むきっかけにもなる。そう捉えることが、多くの人の励みになるのではないかと考えています。

3. 地球温暖化問題はなぜ外交アジェンダとなったのか？ そしてその後

東京大学客員教授 米本昌平

1992 年に成立した国連気候変動枠組み条約は、異端の国際合意である。条約が成立するまでに 5 年前後はかかるものなのだが、この枠組み条約は、交渉会議の設置からわずか 2 年弱で妥結した。しかも条約の目的は「大気中の温室効果ガスの濃度を安定化させる」という壮大なものであり、温暖化の事実も被害もまだ明確ではなかったのに、92 年のリオサミットではほとんどの国連加盟国が署名した。ではなぜこの時点で枠組み条約が成立したのか？ それは 1989 年 11 月にベルリンの壁が突然崩壊し、冷戦が終わって核戦争の脅威が軽くなったからである。

国際政治という特殊な空間は、軍事力を背景に国益を争う場であり、常に一定の脅威で満たされている。だがベルリンの壁崩壊によって核戦争の脅威が大幅に低くなり、国際政治は新たな地球大の脅威を必要とした。それが地球温暖化問題である。ただし、核戦争と温暖化の脅威の類似性で条約ができるわけがない。地球温暖化問題を 21 世紀の外交課題とするよう強く働きかけたのは、冷戦後、国家の再統一を目指すドイツであった。90 年に西ドイツ議会は、次の人類共通の課題は地球温暖化問題であり、先進国は率先して CO2 排出削減をすべきである、と決議している。こうして新生ドイツは、第一回締約国会議をベルリンに招聘し、京都議定書の成立や EU の温暖化政策で主導権をとった。

だが 2015 年成立のパリ協定では、温暖化外交の特権性はなくなり、普通的外交課題の一つになった。今後、温暖化は激しくなっていくが、温暖化対策としては条約の目的に戻り、「生態系が気候変動に自然に適応し、食糧の生産が脅かされず、かつ、経済開発が持続可能な態様で進行できるような期間内に達成されるべきである」という原則に沿って組み立てられるものになる。